

明治 カマンベール拡大へ新棟 芽室工場に90億円

2016年3月4日



明治十勝工場。写真左側に新棟を建設する（明治提供）

【芽室】明治ホールディングスは3日、明治十勝工場（芽室町東芽室北1線）敷地内にカマンベールチーズ製造の新棟を建設すると発表した。ナチュラルチーズの消費が伸びる中で、「明治北海道十勝カマンベールチーズ」の生産を拡大するのが狙い。自己資金で約90億円を投じ、2018年度の生産開始を計画している。

新棟は2階建て鉄骨造り、延べ約9400平方メートル。6月に着工する。同チーズは現在、明治十勝帯広工場（帯広市東6南16）で製造されており、新棟稼働で生産能力は1.5倍の年3000トンとなる。十勝帯広工場は、新

棟稼働と同時にチーズ生産を中止する。従業員約90人は配置転換する。

同社では、同商品名のシリーズを主力とした15年度のチーズ事業売上が338億円と過去最高を更新する見込み。同社によると「家飲み」でのおつまみ需要や料理への使用、健康志向の拡大などで増えているという。

十勝工場は2008年、めむろ東工業団地内に約120億円で新設。敷地面積13万8000平方メートルで、業務用モツァレラ・チェダーチーズ、ホエー粉と市販用の生クリームを製造している。

同社IR広報部は「拡大するチーズ市場に対し、生産体制の強化を図り、チーズ事業のさらなる強化に取り組む」とする。

1954年に操業開始した十勝帯広工場は85年にカマンベールチーズ製造を始め、98年に新棟を建設。敷地面積は3万平方メートル。生産中止後の工場の活用方法は決まっていない。

農業ガイド1050号

2016年3月26日

子牛に初乳3リットル以上を 石井元帯畜大教授や十勝家保研究

獣医学博士で元帯畜産大教授の石井三都夫氏（帯広市、石井獣医サポートサービス代表）や、十勝家畜保健衛生所指導課らの研究チームは、子牛に初乳を3リットル以上飲ませることで免疫を強化し、下痢や感染症などを防ぐことができると啓発している。



「初乳を十分に与えるのが大切」と話す石井代表

研究チームは帯畜産大、道総研畜産試験場、十勝NOSA I 西部家畜診療センター、十勝農業改良普及センター十勝西部支所などの産官学が一体となり組織。十勝家畜保健衛生所の病性鑑定課は、初乳給与量を改善した結果、治療日数の短縮や抗菌性物質の使用を最少限にできることから、有効な下痢症対策として哺育・育成預託施設に勧

めている。

獣医師らでつくる十勝子牛研究会の会長を務める石井氏は、2013年7月に同会の視察で訪れた農場で多くの子牛が下痢を発症していたことから同年8月に対策チームを結成、改善法の研究に着手した。

研究では農家10戸の子牛の預託農場で354頭を調べたところ、調査時には9割の子牛が下痢を発症。預託元の農場での飼養環境の違いや生まれてすぐ子牛が飲む初乳の給与量にばらつきがあったが、初乳量が少ないほど下痢の治りが遅かったことが分かった。

下痢の治療回数と発熱率の相関から子牛の免疫の強さも調べた結果、初乳の給与量が多かった子牛ほど免疫が強くなり、下痢の治療期間が短く治療効果があることが分かった。

一方、下痢を引き起こすロタウイルスと原虫のクリプトスポリジウム・バルバムには抗生物質が効かないにもかかわらず投与されていることから、同チームはウイルス耐性を強めてしまうことも懸念。生きた菌を用いた対症療法として整腸剤の役割を果たすオウバク末、下痢を引き起こす菌を吸着する木炭末や生菌剤が有効とされていることから、治療方法の変更も提唱している。石井氏は「病気の対策以前に、初乳で免疫強化するのが大切」と念押ししている。